

# 虐待・子育て・教育

子育ては簡単なはずなのに…

馬場 正子

# 目次

## I 一虐待一

序章 障害児教育からみた子どもの育ち・ 施設児童からみた子どもの育ち……………	6
第1章 虐待について……………	9
第1節 虐待とは……………	9
第2節 愛着（アタッチメント）について……………	21
第3節 ホスピタリズム……………	25
第2章 虐待と自我……………	34
第1節 自我の歴史の展開……………	35
第2節 欧米の自我……………	35
第3節 東洋の自我……………	44
第4節 日本の自我……………	50
第3章 自我にまつわる諸問題……………	58
第1節 原罪と良心と共感性……………	58
第2節 危機的自我……………	61
第4章 脳と刺激……………	71
第1節 刺激について……………	71
第2節 右脳と左脳……………	75
第3節 少なすぎる刺激 虐待と脳……………	78
第5章 脳のすばらしい働き 「ミラーニューロンの発見」 イアコボーニ（2011）①……………	82
第1節 ものまねニューロンの発見……………	82
第2節 その他のミラーニューロンの実験……………	82

## II 一子育て一

<b>第1章</b>	<b>民俗学からみた子育て</b>	<b>92</b>
第1節	主に時間軸からみた子育て	92
第2節	空間軸からみた子育て	93
第3節	民俗学からみた子育て 時間軸と空間軸の絡み合う世界	93
<b>第2章</b>	<b>現代の妊娠・出産・子育てに対する意識</b>	<b>106</b>
第1節	出産	106
第2節	出産・子育てに対する意識変化	108
第3節	意識変化の検証 現代のこどもは本当に幸せなのか?	111
<b>第3章</b>	<b>ささやかな提言</b>	<b>115</b>
第1節	虐待研究からみえてきたもの	115
第2節	子育て	115
第3節	子育てへの提言	119
第4節	脳の発達と精神の発達	124
<b>第4章</b>	<b>子育ての社会的援助の実態</b>	<b>126</b>
第1節	アメリカ ヘネシー (2004) ①	126
第2節	日本の福祉制度	130

## III 一教育における諸問題一

<b>第1章</b>	<b>自我の成長を妨げている現状と教育</b>	<b>134</b>
第1節	気になる親子関係	134
第2節	児童と教師の関係	136
第3節	児童間・生徒間の関係	140
<b>第2章</b>	<b>現状を変える教育</b>	<b>144</b>
第1節	学校と教育の未来	144

<b>第3章</b>	<b>予防教育</b>	<b>150</b>
第1節	予防教育としての教育現場での援助と配慮	150
第2節	ワンパターンからの脱却	150
<b>第4章</b>	<b>「いのち」の教育</b>	<b>155</b>
<b>第5章</b>	<b>感覚と身体 of 教育</b>	<b>160</b>
<b>第6章</b>	<b>感情の教育、芸術教育</b>	<b>167</b>
<b>第7章</b>	<b>感覚を重視した智慧の教育</b>	<b>178</b>
<b>第8章</b>	<b>さらにいっておかなければならないこと</b>	<b>188</b>
	<b>あとがき</b>	<b>195</b>

I

虐待

## 序章 障害児教育からみた子どもの育ち・ 施設児童からみた子どもの育ち

35年の教員生活を振り返ってみるとやはり最後の養護学校（1993.4～2009.3）のことが一番印象深く感じられる。単に現在に近いというだけでなく、やはり障害児教育には教育の原点というべきものを数多く感じたからだと思う。具体的な実践は別にまとめた本をみてもらえればと思う。ここでは障害児教育の奥に横たわる不思議にスポットをあてて考えていきたい。

私の勤務していた養護学校は一般家庭から通学する児童の他に養護施設から通う児童がいた。最初、施設から通う児童は最初1人だけだった。彼は耳の不自由な子どもを措置している障害児対象の養護施設から通学していた。実は彼は耳が不自由なわけではなかった。耳が顔の方に倒れていて、言葉をかけても反応せず、本人もことばを発することがなかったため聾児と思われていた。最初、知的障害があるだけに思えたが、ひどく情緒不安定な子どもだった。週明けは特に機嫌が悪いことが多く、朝、軽いランニングをしていて、よく泣きだし、髪の毛の長い先生の髪をひっぱり走れなくなることがしばしばだった。また、日によっては、給食になると泣きだし、服をビリビリにやぶいたり、脱いでしまったりで十分に給食を食べることができないことがあった。最初はどのようになのかわからず、どうしていいかわからなかった。よくみていると、どうも情緒不安定の原因は曜日に関係しているようだった。施設の職員に聞いてみて、原因が分かってきた。

この施設は親のいる児童、受け入れてもらえる家庭の児童は日曜日に家庭に帰したり、もっと余裕のある場合は普通の日にもスクールバスのバス停までお迎えにきてもらい、施設につれて帰ってもらうということをしていて、彼の機嫌の悪い日は週明けであり、お迎えの日だった。彼の母親はアジア出身のシングルマザーで日本語もあまり上手ではなかった。そこに彼が生まれ、普通でも育てるのに苦労する上に知的障害もありで生活の中で「テ」もでていた。当然、彼との関係も悪くなり、悪循環に陥っていた。

私は彼と関わる時間を増やし、彼の好きなこと（虫や電車）を共に楽しんだ。すると、少しずつ情緒も安定し、言葉もでてきた。母との関係も少しずつ良くなってきた。中学部に進み、担任の先生から、「この頃、子どもがかわいく思えるようになってきました」というお母さんのことばが伝えられた。

この施設では経営上の問題もあったようで、聾児だけでなく知的障害児も受け入れることになり、施設から通学する児童も増えた。また、通学区の変更で、本校の受け入れとなった施設や先の施設に隣接している一般養護施設からも児童が来るようになった。一挙に施設からの児童が増え、在籍児童の3分の1の児童が施設児童ということもあった。

その後、転校生も含め、8人中4人の施設児童のいる学年を持った。先の養護施設の子どもたちは一見、お行儀もよく、会話もでき、知的障害を感じさせなかった。しかし、乳幼児期に暴力を受けたり、ネグレクトされた子どもが多かった。

そのころ、学校では、グループ別に分けた学習を始めた。担任していた彼女たちは学習に積極的で、熱心に学習に参加していた。文字もよく覚え、積極的に発言してくれていた。数の学習も水道方式を採用し、量の比較では、液量、長さ、重さなどを比べ楽しんでた。しかし、数の学習になり、足し算、引き算になり計算になると、少し、とまどっている様子がみられるようになった。暗算がうまくいかない。自信がないのか1+1でもタイルを使ってやりたがる。シエマが作れないようだ。言葉の学習も後にひらがなから、漢字学習になると、定着が悪くなった。言葉として難しいものが多くなったせいかもしれない。そんなに難しいと思わない東西南北、姉・妹・兄・弟といったことばでも難しいようだった。さらに、学習が進むとその傾向は強くなった。また、定着が悪く、昨日できていたことが、今日はできなくなっていることも増えてきた。学習面だけでなくコミュニケーションにも問題があった。ゲームをすると、負けることが許せないとばかりに大声をだす。特に同じ施設の児童が勝った場合、「あの子悪いわ〜」と怒ったり、泣いたりしていた。ゲームに慣れると、今度はこっそりいじわるをする。偶然を装って？ 靴を蹴飛ばすなどこっそり、ひそやかに行動していた。乗り物も救急車のみが好きだ。タイタニックの映画もみんなが逃げ惑うところばかりみている。

特に担任していたA子は怖がりであり、不安感の強い子どもだった。A子は両親共に健在だったが、養育することができない状態にあったようだ。精神的な病をもっていたようで、施設の職員は彼女には両親はなくなったと言いつけていた。

対照的にB子は自由奔放で入学時はちょっと、たどたどしい話し方だが、思ったことをどんどん話す子だった。シングルマザーの母は彼女の姉と共に子どもをおいて出ていくことが多かったようだ。ある日、何も食わず、2人きりにされているのを発見されこの施設に措置された。しかし、姉は知的な遅れはないということで、B子だけが入所していた。B子は母親がいるということで、週末や夏休みなどに家庭に帰っていた。A子に対して自慢することが多く、彼女を悩ましていた。しかしB子も家庭に帰って母や姉ともめることが多く休み明け、不機嫌な様子で学校に来ることがよくあった。

担任していた施設からの児童のうち男児2人も別の公立の障害児の養護施設の子もたちであった。C児はダウン症の子どもだったが、慣れない環境もあってか、入学から1月以上よく泣いていた。その後落ち着いてきたが、彼の場合気になったのは給食だ。ものすごい勢いで食べる。また、手先も不自由なので、ジャムやバターなどの袋を開けることができないが開けるのを手伝おうとすると、あわてて取り返し、口のまわりをべとべとにしながらやぶって開けていた。3年生ぐらいから、やっとジャムやバターを開けさせてくれるようになった。彼のいた施設は職員も少ないせい、彼の様におとなしく手も不自由な幼い子は食べ物他大きな子に取られることもあり、自分のものを確保することに必死だったようだ。3年たってやっと信用してもらえたようだ。

D児もC児と同じ施設だったが彼は6年生からの転入性である。少し、ADHDの傾向があったが体が大きく最初ははにかんでいて大人しくしていた。彼の場合、不登校で母に対し

て、暴力をふるうこともありこの施設にやってきた。5月途中からの編入ということもあってか、学校に対しては不満たらたらで、4月生まれの彼は「誕生日会してもらってない」にはじまり「描くのいや、計算めんどろ」と不満を並べ立てていた。彼は他の児童への八つ当たりも目にあまるので、ある日注意すると、突然怒り出し、泣いて自分は病気（アレルギー疾患）であり、なおらないので、生きていてもしょうがないとわめきだした。病気はなおりにくいかもしれないが、体質は変えていけること、お母さんは死なせるために生んだのではないと言い返すと、落ち着いたようで、それから少しずつ落ち着いてきた。

私は彼女たちを6年間担任した。グループ学習では他のクラスの施設児童も含む子どもたちの学習面をみてきた。ほとんどが彼女たちと一緒にそれ以上に定着がよくなかった。このグループの中には家庭からきている自閉症の子どももいた。この家庭からの子どもたちは集中力がなく、しっかり聞いていないようにみえた。けれども学習したことはそれなりに定着している。施設の子もたちだけと学習しているなら、私の学習のやり方が悪いと認めなければいけないが、一方では成果があがっている。他校の先生の集まりで話をすると同じような疑問を抱く先生が多数いた。

もやもや、思っている時に杉山登志郎氏の著書「子ども虐待という第四の発達障害」に出会った。あいち小児保健医療総合センター長兼診療科部長をされている方で多くの子どもたちをみておられたが、症例からみえてきたことがあると述べている。引用すると、《数多くの被虐待児をみていると、皆きょうだいのように似ている。まず、知的には境界線知能を示すものが多い。さらに知的なハンディキャップを勘案してもなお知能に見合った学力を得ることが難しく、学習に大きな困難をかかえるものが過半数を占める。

また、多動性行動障害を呈するものが非常に多く、衝動コントロールが不良で、ささいなことから相互に刺激をし合い、時にはフラッシュバックを起こし大ゲンカになるか、フリーズを生じるかといった状況を毎日のように繰り返している。……》

徐々に杉山は被虐待児は臨臨床的輪郭が比較的明確な、一つの発達障害症候群としてとらえられるべきではないかと考えるようになった。

杉山は現在、被虐待児を第四の発達障害と呼んでいる。《第一は、精神遅滞、肢体不自由などの古典的発達障害、第二は自閉症症候群、第三は学習障害、注意欠陥多動性障害などのいわゆる軽度発達障害、そして第四の発達障害としての子ども虐待である》としている。

私も虐待の問題が子どもたちに影響をあたえていると考える。言いかえると、虐待が子どもたちの発達を阻害していると考えている。学習能力、コミュニケーション能力、善悪などの道徳・倫理観の発達と虐待との関連を明らかにし、子育てや教育の意味を歴史的・民俗学をもとに考察していきたい。

## 第1章 虐待について

### 第1節 虐待とは

私はここでは虐待は養育における不適切な対応としておく。日本では、2000年児童虐待防止法が制定され、2004年に一部改正された。それによると、身体的虐待、性的虐待・ネグレクト（育児放棄）心理的虐待に分類されている。

虐待研究は日本だけでなく、世界中で行われているが、日本の歴史を中心に考察し、なぜ日本でも増えているのかをみていきたい。

#### (1)文学にみる虐待の歴史 平田（2011）③

日本は山上憶良の歌「しろがねも くがねも玉も何せむに まされる宝 子にしかめやも」を待つまでもなく子どもをかわいがり、大切にす国民だといわれてきた。確かに経済的な困窮から、そして障害児の間引きが行われてきたが、生かすと決まった子どもは家族の一員となり、生存は保障された。西洋は宗教的に殺すことは禁じられていたため間引きの記録はないが、積極的には殺さなくても育てることもしないということが見受けられ、早くから孤児院が作られた。日本は農耕民族で、村単位で、家族そろって農耕に励む人々の集まりであった。和をもって、生活する日本の人々に対し、狩猟を基本とするヨーロッパの民は自分の「ちから」を信じ野生動物に立ち向かっていたと思われる。和を重んじるより、自分を鍛え、力をつけ、強い個をめざしたと思われる。岸田秀はこの傾向は今の大学入試にみられるという。欧米は大学入試はそれほど厳しくなく入りやすいがきちんと勉強しない者は卒業できない。それに比べ、日本は入るのは難しいが合格すればなんとか卒業させたいという「力」がはたらくのかほとんどの学生が卒業できる。この世への入口は厳しいが入ってしまえば何とかする子育てとオーバーラップするとしている。

「江藤淳の成熟と喪失」①に2つの詩がでてくる。日本と西洋の子育て観の違いがよくでているので引用してみることにする。江藤（1967）①

ついた先で屠殺される運命の仔牛の群れを率いて大草原をゆく孤独な若いカウボーイのうた

ゆっくり行け、母なし仔牛よ  
 せわしなく歩きまわるなよ  
 うろうろするのはやめてくれ  
 草なら足元にどっさりある  
 だからゆっくりやってくれ  
 それにお前の旅路は  
 永遠につづくわけではないぞ  
 ゆっくり行け 母なし仔牛よ

## ゆっくり行け

安岡章太郎の小説にでてくる母のうた

をさなくして罪をしらず  
むずかりては手にゆられし  
むかし忘れしか  
春は軒の雨、秋は庭の露  
母は泪かわくまなく 祈るとしらずや

甘い母の情愛を唄った安岡章太郎の作品中の唄とカウボーイの凜とした孤独をにじませた唄を比べれば日本とは違う文化や歴史があるのは歴然とした事実である。このように民族や地域により、個の成り立ちがちがうのでここでは日本の歴史を振り返りながら虐待を考えていきたい。

私が小学生のころ、貸本屋ができ、マンガ本を借りに行くと、女の子用の棚にならんでいるマンガには涙を誘うマンガのオンパレードで、大部分は「継母」にいじめられる子どもの話だった。虐待が報じられ始めたころ、筆者の母世代からは「実の子にそんなことをするなんてどうして？」というのが主な反応であった。

平田（2011）③の「虐待と親子の文学史」は主に明治以後の文学をひも解きながら虐待の歴史を論じている。明治初期の親は江戸時代を引き継いでやさしかったようである。しかし、家父長制が定着し、武士から軍人へと支配者が変わる中で、正宗白鳥の「何処へ」（P68）文学史（51頁）で主人公の父が軍人の姦通事件に対して、『「どうも、軍人が腐敗しちゃう困るな、武士道の精神が衰えるとそんなことができて来るんさ。今のうちに社会に士気を鼓舞しなければ、日本の国家も将来が案じられるぞ」「今じゃ学校教育も柔弱に傾いているからよくない、それに過程で小さい時分から武士の魂を叩き込まんから、堅固な人間ができないんだ。この時期、きこえてきていたのは折檻であり、鉄拳、母は尻を叩くか家から追い出すであった』』

大正時代には中流階級に専業主婦が現れてきた。家業もなくなり、経済的に少し余裕のある主婦は家事すべてと子どもの養育も担う存在として社会的にはっきり認知された。ちなみに上流階級の主婦は有閑階級のマダムと位置づけられ、内職をしなければ家計を支えられない主婦は貧乏な家の女房となった。大正時代には核家族が過半数になっていたのも、祖父母の支援も受けることができず、多忙を極めていたと思われる。

宮本百合子の「貧しき人々の群れ」には母親の暴力がでてくる。『食うてばかりけつつかってからに、ろくなこと一しでかさねえ奴らだ。これ！ わびしな。勘弁してやるとよ、なんとか言いなてば。と子どもの腕をつかんで小突いたり何かしても……中略『これ！ どうしたんだ？ う！ おわびしねえつもりなんけ？』』というといきなり大きな手で鎖骨が折れただろうと思うほど急に子どもの首を突き上げた。母のイライラや暴力がはっきり書きこま

れるようになってきた。

大正から昭和にかけて、戦争が続いた。銃後の母と呼ばれ、表立った書物には虐待などをのせる余地はなく、文学にもみあたらない。

戦後、すぐは私のいう「継母もの」に虐待が現れていたが、最近の文学はかなり様子が違う。1987年、父親の家庭不在を描いた増田みず子「一人家族」ではバラバラな家族が次のように表現されている。《父上は大学教授、母上は弁護士、八歳年長の姉上は大学勤めの医師というように、家族それぞれ有能すぎて、寸暇を惜しんで働き活勉強せざるを得ない職業に就いている人々ばかりだったから、彼はいつも取り残されて一人ぼっちだった。家の中で常に最優先されるものはそれぞれの仕事であり、それだからこそバランスもとれていた。もちろん彼を除いては。彼はいくら頑張っても優等生であることを当然視され、逆に淋しがったり不満を訴えたりすれば嘲笑されるか軽蔑されるかした。家の中でも外でも同じことだった。誰もが彼の家族をほめ、羨ましがった。でも彼はお手伝いさんの作る食事を一人きりで食べなければならなかった。少年である彼の唯一の現実は、その孤独感であった。ふた親や姉が互いに仲良くいつているのかその反対なのかさえ、めったに顔を合わせる機会がなかったから、見当がつかなかった。》

そしてバラバラ家族を描いたもう一つは山田太一の「岸辺のアルバム」がある。《まったくなんて家だ。喜びを伝える相手が一人もいないのだ。》《遠くに我が家がみえた。ロボットだ。あの家にいるのは人間じゃなくてロボットだ。》このようにバラバラ家族であるが、長男繁が家族の絆を取り戻そうと、がむしゃらに頑張る。決して諦めようとしめない。次々と、家族を分断している境界を侵犯していくそして今までの家を象徴していた家屋が洪水によって流失したことをきっかけとして、家族四人は再生の道を歩きはじめる。小説は父親謙作の次の言葉で終わる。《おい、話は終わった。待っている。四人で帰るんだ》最後に希望が託されていると平田厚氏はのべている。

虐待される子どもの側から描く文学はむずかしいが、平成になり子ども虐待がテーマの本が続々登場してきた。平田厚氏は身体的虐待として内田春菊の「ファザーファッカー」をあげている。実父からの身体的虐待は次のようなものである。《幼稚園に行ってたときだと思おうが、たまたま父が家にもどってきて金目のものを探していたとき、私は彼に『おとうさん、たまにはお金を持ってきてください』と敢然と言いつつ放ったことがある。しかしそのとたん、父は『こどもは黙っとれ！』と怒鳴り、筆筒の引き出しを引っ張り出して私の頭をぶん殴った。大きな音がしてびっくりした私は声をあげて泣いた。おかげでその場面はよく覚えている。また養父からも身体的虐待をうけている。養父は畳を揺らして障子に走り寄って来て、鬼のような顔でバーンと音を立てて障子をひらいた。なにか大きな声をあげながら私を殴り、突き飛ばし、台所の横の便所まで引きずって行き、その中に私を入れると大きな音を立てて戸を閉めた。中は真っ暗であった。「そこにずっといろ！ お前のような者は便所で暮らせ！」彼は廊下でいつまでも憎々しげに私を罵っていた。しばらくすると、ガンガンと金槌を振るう音が聞こえてきた。中略 彼はその上に見せしめのためにくぎまで打っているのだった。》

ネグレクトとしては天童荒太の「永遠の仔」の長瀬笙一郎がうけたネグレクトをあげている。《幼い頃、母親が一月以上も帰ってこないことや、帰ってきて、一日か二日でまた出ていくことが、たびたびあった。そんな時笙一郎は電気もガスもとめられたアパートの狭い部屋の中で膝を抱えて、ひとり過ごしたものだ。悪い夢を見た時など、怖さのあまり、電灯がつくアパートの共同便所のなかで眠り、ほかの住人から驚かれたり怒鳴られたりしたことが何度もあった。母親が食事にと置いていったわずかな金もつき、暗く悪臭のこもる部屋で、餓死寸前まで横たわっていた記憶が、いまでも彼をさいなむ。眠りばなに当時のことが思い出されて、跳ね起きることもしばしばだった》

そして心理的虐待として、青木和雄の「ハッピーバースデー」をあげている。主人公あすかが母親の心理的虐待で声を失ってしまうが、祖父母のちからによって声を取り戻し、生まれ変わったあすかは学校内のいじめにも正面から立ち向かっていき、まわりの人々も生まれ変わっていくという物語である。その母親による心理的虐待は次のようなものであった。

『あいつにさ、水ぶっかけられたんだよ。』『ひどいことするのね、あすかは。まったくどうしようもない子だわ』お酒が入ったママの声はずっと大きくかん高くなっている。『ママがあすかの誕生日を忘れたからってさ、なんで、ぼくが水をかけられなきゃいけないんだよ』『あっ、そうか。今日だったんだ。あすかの誕生日』『やっぱり、忘れてた。』『だって、忙しかったんだもの。でもねえ、お誕生日をしてほしかったらあすかも努力すべきよ。直人君みたいに、お勉強もできていい子だったら、ママ、絶対に忘れないのに。あすかはなにをやらせてもだめなのよね。直人君と比べて、何ひとつ、いいことないんだもの。ああ、あすかなんて、ほんとうにうまなきゃよかったなあ』ママのことばに、あすかの心は、ひりひりと焼けつくように痛くなる。》平田厚氏は、自分が自分の子に投げつける言葉は連鎖するとも述べている。

性的虐待を描いたものについても述べている。先の「ファザーファッカー」の後半は養父の性的虐待だらけになる。

《養父の馬鹿ばかしい教育もどきに付き合わされるのはまだいい。私にはどうしても許せないことがあった。それは私の胸やお尻を触ることだ。『どら、おっばい障らせてみろ』などと言って手を伸ばしてくるのだ。》

しかし養父の性的虐待はどんどんエスカレートしていく。

《あいかわらず、養父は私の体を触るのをやめなかった。それどころか私が初潮をむかえたあと、胸などを叩く程度だったものが、いきなり乳房を握りしめたりするようになった。中略「しばらくして、人の気配で目が覚めた。私の後ろから、布団の中に誰かが入ってきたのだ。ポマードの臭いで養父だとわかった。養父は後ろから私のおしりの間に指を入れてきた。また、診察かと私は心からうんざりした。ところがそれは指ではなかった。》

物理的にも心理的にも逃げることができずにいる時間は長く苦しい。性的虐待を受けた人に、乖離が見られることがあるというのは自分の中で現実から逃れるすべを身につけているとも言える。

色々な虐待事例とも言うべき作品群をみてきたが、どれも被虐待者に多大な傷を負わせて

いるのはまちがいないと思われる。その中でネグレクトや心理的虐待は静かに推移するので、周りが気づきにくく、本人も傷を負う割には相手を意識しにくいということがある。これが、社会に対する恨みに転嫁しやすいのではと私は推察している。

また、虐待が始まったのが、早いと生存の危機を感じ、とり返すのが困難ともいわれるが、もの心がついてからの虐待には別の難しい問題が生じる。乳幼児期の甘い親との思い出が突然に冷たく苦しい現実と変貌をとげるので、水蒸気爆発などを連想させる激しい爆発を起こす危険が高まり、非常に不気味である。どちらにしても本人にも周りにも社会にも多大な被害を与えるものである。

## (2)虐待研究について

次は最近の研究についてみていきたい。

平田は3名の研究をあげている。

①津崎哲郎氏は次のようなことをあげている。

- ⑦親に被虐待経験があったり、十分なマザーリング体験をもっていない。そのため人格として、未成熟、被害感が強い、劣等感が強い、攻撃的である、自己中心的である。
- ⑧親の児童に対する理解が十分でなく、過剰な期待をかけたり、放置したり、自己本位に操作しようとした。
- ⑨養育技術がたなく、往々にして力の養育に頼り、柔軟性に乏しい。
- ⑩乳幼児期に親子の分離体験があり、親子双方に情緒的組織がみられる。
- ⑪家族の中に多様なストレス、トラブルが生起し、夫婦の相補性が低い。
- ⑫児童自身の誘因としてもなつかない、ききわけがない、育てにくい、発達の遅れ等があり、虐待の悪循環を形成している。
- ⑬親族や近隣との関係が陰悪であったり、疎遠であったりで社会的に孤立した生活であることが多い。

②西沢哲氏 虐待傾向の実態調査から7因子48項目にわたる虐待の心性を指摘している。

- ⑦体罰肯定観をもっている。
- ⑧自己の欲求を優先する傾向がある。
- ⑨子育てに対する自信喪失
- ⑩子どもからの被害認知（被害をうけていると感じる。）
- ⑪子育てに対する疲労、疲弊感
- ⑫子育てへの完璧志向性
- ⑬子どもに対する嫌悪感・拒否感

③川崎二三彦氏は虐待の要素として、次の4つの要素をあげている。

- ⑦多くの親は子ども時代に大人から愛情をうけていなかったこと
- ⑧生活にストレスが積み重なって危機的状況にあること
- ⑨社会的に孤立化し援助者がいないこと

⑤親にとって意に沿わない子であること

以上、三氏の項目をみて、虐待要因を自分流にまとめてみたい。まず、環境要因と認識（考え方・感じ方）要因にまとめることにする。

**環境**は家庭環境・経済環境・支援環境である。

①家庭環境・人的環境をみると配偶者や舅・姑との関係悪化、場合によっては子ども本人との関係悪化も含まれる。単親家庭、実家と縁の切れている人などが、問題を抱えると追い詰められることはよく耳にする。しかし、これら全てだめでも特別に援助者が現れて乗り越える人もいる。何らかの絆はやはり、生きていく上でのエネルギーそのものである。

②経済環境はお金であり、住まい、将来不安も含まれます。子育てにはお金が必要である。成長するための食費、安全でそれなりの広さを確保した住まいのための住居費、最低限以上の衛生や健康を考えた衣服費用、最低限以上の文化的生活を保つための費用は特に必要なものである。

③支援環境は子育てに行き詰った時、相談援助できることが必要です。祖父母に相談したり、子どもをみてもらえるかどうか、古くは村などの共同体、現在でお隣はさん、近所の町内会、公的な支援をしているか、声をあげることができるかどうかなどである。

④以上の他、過去の家庭環境、つまり親の家庭環境が愛情に欠けている場合も含まれる。しかし、この虐待の連鎖は差別意識を拡大する恐れもあるので、各事例を慎重に見ていく必要がある。

**認識（考え方・感じ方）**

①これには暴力・性・暴言に対する肯定感をもっていること・否定感のなさがあげられる。先に述べた虐待されながら育った人の中には当然のこととして、親にされたことを繰り返す場合がある。当然の行動と思いがしていることに気づかない場合もある。また、気づいてもまた同じように行動してしまい、自分に対して、嫌悪感や無力感を感じて追い詰めてしまうことがあり、解決には慎重かつ、粘り強い支援が必要である。

②自分の欲求を抑えることがむずかしく、自己存在への危機感を持っているのである。また、今まで通り遊び呑気にしていたかったり、注目されたかったり、行動を阻止されていると感じストレスを感じるなどが含まれる。

③もう1つは非常に恵まれた、幸せに見える環境の中で暮らす人々の中に潜む感覚である。それは完璧主義であり、2者選択志向である。仕事などで、求められる完璧主義を育児に持ち込むと危険である。

また、バランス感覚を重視し、子育ては70点を目指すべきというNobody's Perfect Japanの原田正文氏によると『自己効力感が高いということが育児場面では困難な状況を招いているという意外な結果が出ている』と論じている。原田（2008）④

## ① 特性的自己効力感に関する質問文（兵庫レポート 第三次調査）

①行動完了しようとする意思	初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける。
	重要な目標を決めたら最後まで成し遂げる。
	自分がたてた計画はうまくできる自信がある。
②行動生起における自信	人の集まりの中では、うまく振る舞える。
	私は自分から友だちを作るのがうまい。
	思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できる。

《「①の行動を完了しようとする意志」が強いことが「子育て困難感」を高めていること。また「①行動を完了しようとする意思」が強い母親は「②行動生起における自信」がある傾向にあるが、「②行動生起における自信」がある母親は「情緒的サポート」を受けにくく、孤立する傾向があることも判明している。

そして、「①行動を完了しようとする意思が強い母親の子どもは」発達が遅れている。同様に「②行動生起における自信」がある母親の子どもは発達が遅れているということが判明している。

これらの結果は表で使用した質問文で①「自己効力感が高い」と評価された母親は意外にも育児場面では困難な状況を招いているだけでなく、こどもの発達にもよくないということを示している。

自分自身の学齢期や会社社会では有能でよくできる母親が、子育てでは困難を抱えているという事例はよく見聞きする》とも論じている。

また、先の70点でいいというのは30点くらいはどうでもいいと思って子育てすると無理なく子どもに関われるという。100点の子育てとは《親の思い通りの子育て、思い通りに動く子どもである。それは思春期以後通用しない》というのが原田氏の考えである。

さて私が考えるもう1つの思考方式は日本の現代人に共通する2者選択だ。黒か白かと問い詰め、どちらかを選択する思考形式である。通常○×方式ともいうが、非常に性急であり、短絡的である。狭い、限られた場面では有効で効率的であるが、世の中大部分の事象ははっきりしないグレーゾーンである。特に子育てにおいては、○○までにできなければとか、○○のはずであるべきと思って子どもに接するのは子ども本人だけでなく、養育者にも負担を与える。子どもは決して育児書の示す事例通りには成長せず、遅れたり、すすんでいたり、例外的な行動をとるのがふつうである。どんな素晴らしい子育て論でも完璧になぞり、その本筋からずれることを許せないとなると、自分で自分の首をしめることになる。特にユニークな子どもの場合親も子もストレスのかたまりになる。恵まれていると思われる家庭での虐待はこのケースが多いと思われる。

さて、虐待の定義だが、私はここでは環境悪化と独特の認識が悪い方へと転がって、養育